



夕刊の発行日と価格に関する情報。発行日は毎月二十日、価格は紙幣五銭、硬貨五銭と記載されている。

詩南車終刊號短歌評

高木愛二

吉田甫氏 ふう〜手をふきながら戻つて来た妹の頬に純情が真赤に燃えてゐた

高木愛二

作者病中の作であらう。感動させられる歌。他もよい新調和歌をやる人は連作の場合一首の独立性を考へなくてはならない。この歌もこれだけでは何を表現してゐるのか明瞭でない。前詞を

高木愛二

俳句の味や、躍動の足らないのが欠陥であらう。物音一つ聞えない夜更け。机に向つて物書き居ると、この夜更けいつ迄も自分を

高木愛二

白木英尾氏 山からくる淡い哀感。おれは石工の背巾から話しかけた

高木愛二

石の上でかちんかちん。石割る音が雪もよひの空に響きわたる。働いてゐる人間の顔を、のせて、あどからあとからトロッコが走る

高木愛二

何れも傑作。新調和歌に逃避して長いだけに喰ひ盡した洗練さがある。新調和歌も、迄切つた寫生に敬服する。一紙に哀淋を感ずる。冷水を背にかけられる様だ、三尺の秋水鏡を断つと言つた感じ、こゝを恨みながら、然も戀情縮に至つて作者快心の作と言ふ事ある戀心が荒立つ鼻境に古い。『毛並や肌』

高木愛二

青い灯 八幡秋月 何しろ夜に見た惚つた美い。どろどろと全部ハゲて、どろどろと現れて顔が映笑とじゃ。アケもなくウキ立せる夜の魅力なんかは、何處の隅に、もくもく静まりかへつた空気が、とボツクスと壁と植込と其の他の裝飾物とが白きつた。芝の夢か、程りか、

高木愛二

拈華微笑 日雁の火つけ 三重奏、物語極まるトリオ

お蘭のお蝶 渡邊歌碑作 布施長春書

夜 磯原 栗原北斗 園呂理の枯木

新歌壇 小山田 滋選 赤村 草野 收 笛

社會の今日 八重樫吹つき春を深めり

月斗 此の戀も何か終りに消すまいか、二人のあとを波が消すやう

時折り活字の後を追つて しかし、あや子は愛憐た



編笠を取つて突出した顔は十年前に千葉の道場を破

手相の押買をされて此の忙

「私つて、ア、私ぢや」

學生靴大賣出し 斯界のナンバワン大塚の靴

開業廣告 弊店自慢の衛生上最も光輝ある釜めし

あけぼの 御同伴歓迎します

地方特約販賣店 平屋百貨賣店

小川靈峰やうかんが出来ました

安齊外科醫院 石城酒造 唎酒會

優等白馬の 入選 辰の日本店

良品廉賣に勝る 商略なし 磐城セメント特約代理店

大和田醫院 耳、鼻、咽喉科専門

生花教授 家元龍生派池坊

愛國シンジの現出 特價一臺金參圓五拾錢

安齊外科醫院 石城酒造 唎酒會

増田耳鼻科醫院 (入院隨意)

井阪醫院 婦人科 産科

